



町会連合会の活動紹介

危機管理・安全部

第一地区町会連合会は、地区の防災・防犯活動を円滑に実施するため、危機管理・安全部を設置しています。町会連合会副会長（危機管理・安全部担当）の春日孝介さん（西五町）にお聞きしました。

取り組みと今後の方向性について

防災活動として、地区防災倉庫を神明宮南側に昨年新築しました。引き続き防災用備品の配備を計画しています。また、町会ブロック単位による避難訓練や避難所運営訓練の実施を通して日頃の備えを強化していきたいと考えています。

防犯活動では、日頃の防犯活動を積み重ねながら、地区防犯カメラの増設、特殊詐欺被害防止のための啓蒙活動強化、浄化パトロールの人員充実を図っていききたいと考えています。

安心・安全なまちづくりに重要な活動です。災害や犯罪が起きた時では、間に合いません。日頃の活動にぜひ参加してください。



▲避難所訓練（Mウイング）



▲特殊詐欺被害防止啓蒙パレード



平成29年1月1日現在

世帯数：865戸(+4)

人口：1582人(+8)

男：764人(+1)

女：818人(+7)

Presented by
視聴覚委員会



まちかどフォト

今回号から視聴覚委員会による地区の記録を目的とした写真コーナーを掲載します。その時々様子を写す「まちかどフォト」、地区内の文化財を紹介する「地区の文化財」の2シリーズです。

みなさんからの情報も
お待ちしております。



「博労町三九郎」1月8日(日)
雪の予報が出ていたため、
急遽昼間に実施していました。

第二地区の文化・伝統 シリーズ③ 「袖留橋(緑橋)伝説」



昨年末、井川城跡と林城跡からなる小笠原氏城跡が国の史跡に指定されるとの報道がありました。第一地区には、小笠原氏ゆかりの文化財として「袖留橋(緑橋)」とその伝説があります。

室町時代、信濃守護に任ぜられた小笠原氏が当初館を構えたのが現在の井川城で、その後戦国期に防御性の優れた山城として構えたのが林城でした。武田氏によっていったん当地から追われますが、武田氏滅亡後に領地を回復すると、深志の地名を松本に改めました。鎌倉時代にまでさかのぼる格式の高い一族で、武家の有職故実の伝統をよく継承していたことからその後の礼法小笠原流の宗家となる、

松本にはゆかりの深い一族です。

袖留橋は本町5丁目と博労町の間を流れる長沢川に架かり、明治11年に大手門の取り壊された石垣を再利用して石橋に改修されたときに、「緑橋」と改名されました。長沢川は薄川の支流にあたり、深志神社の脇から緑橋を通り、その先は暗渠として田川に注ぎます。

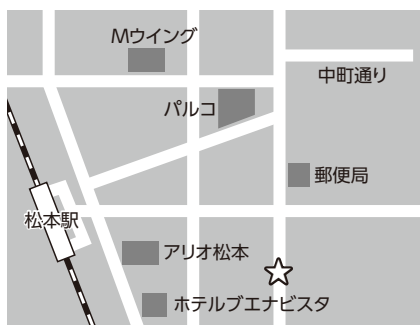
大坂冬の陣が始まる1614年、松本城を築城した石川氏が改易されると、8万石に加増されて再び松本城主となったのが小笠原秀政です。冬の陣への参戦は嫡男忠脩(ただなが)のみでしたが、戦闘に加わることなく和睦が成立しました。翌年の夏の陣では、秀政が出陣し、忠脩と次男忠政は在城警備が命じられたものの、二人は命に反し出陣し、5月7日の天王寺口の戦いでは、秀政、忠脩父子は討ち死にし、忠政も重傷を負いました。小笠原氏の家督はこの忠政が継ぎ、2年後には2万石の加増をもって播磨

国の明石10万石へ、さらには豊前国小倉15万石の大大名となり、明治維新を迎えることとなります。

大阪出陣時、忠政は若干18歳。若武者と呼ぶにはまだ幼く、着衣もたもとが長い振袖の着物を着ていました。忠政の出陣を哀れに思った乳母は松本城から後を追いつ、忠政の袖にすがって引き留めたのが、長沢川にかかる袖留橋でした。この時忠政は乳母への思いとともに袖を断ち切つて出陣し、乳母の手にはその袖が留まったことから橋の名前になったといわれています。春の訪れにはまだ日もあり、厳しい寒さも続きますが、大河ドラマの余韻が残る中、小笠原氏と真田氏の因縁を身近に感じるこのとき文化財に足を延ばしてみたいかがでしょうか。



袖留橋は本町5丁目と博労町の間を流れる長沢川に架かり、明治11年に大手門の取り壊された石垣を再利用して石橋に改修されたときに、「緑橋」と改名されました。長沢川は薄川の支流にあたり、深志神社の脇から緑橋を通り、その先は暗渠として田川に注ぎます。



袖留橋(緑橋)の所在地

第一地区公民館の運営体制を変更しました

- 館報委員会 ●体育委員会
- 文化委員会 ●視聴覚委員会

の4委員会となりました。
今後ともよろしくお願いいたします。



総務大臣表彰受賞 おめでとうございます

土屋 忠史さん(神明町)

多年にわたり町会長を続けてこられており、この度総務大臣表彰を受賞されました。

電車通り

今年も四柱神社の二年参りで年を越したが、初春の光景は昔と様変わりがある。

大晦日の境内は、数年来のパワースポット人気の影響なのか、若者たちのカウントダウンコールで沸き返っていた。あめ市の福だるま売りや三九郎では子どもたちの元気な声も聞こえたが、心配そうに寄り添う保護者の姿が随分と目立った。

二月三日の節分も、近年は福は内、鬼は外の豆まきではなく、恵方巻きを食べる日として定着しつつある。

伝統文化や伝統産業の継承には、現代の暮らしのなかに古いものと新しいものの良さを共存させ、溶け込ませていくことが大切といわれる。伝統行事が時代の流れとともに形を変えていくことは仕方ないが、何百年も続く祭りや風習の由来、成り立ちだけは大事にしたい。

この第一地区版では昨年からは「第一地区の文化・伝統シリーズ」の連載を始めた。地元に残る伝統行事のこころを次世代にしっかりと伝承する機会となることを願っている。